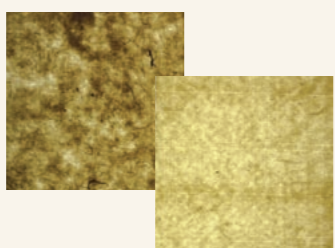




浜田市の石州和紙会館で久保田さん(右奥)から指導を受ける研修員たち。左奥の女性がヤンドンさん



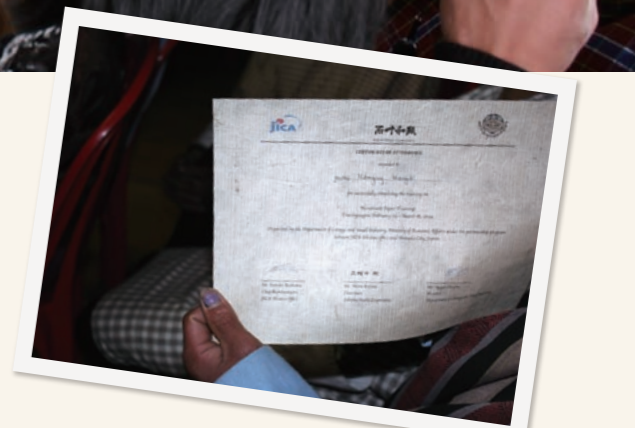
ヤンドンさんが作った紙には大きな変化が。ごみが含まれていた紙(左)からごみがなくなり厚さが均一になった(右)

神宮などの文化財の修復に使われるほど。最近では、ランブシエードや名刺など、和紙を使った多彩な商品開発にも力を入れている。この浜田市の伝統産業が今、海を渡って力を発揮している。その場所はヒマラヤの山々に囲まれた国ブータンだ。仏教への信仰が強い同国では、経典に使うため、紙すきが何百年と受け継がれている。しかし収入にならないため後継者が減り、その伝統が失われようとしていた。

そこで白羽の矢が立ったのが浜田市。「紙すきの伝統を守ることができのなら」と、1986年に交流が始まった。「ブータンの紙は質が悪く、包装紙にしか使われていませんでした。品質を上げ、付加価値をつけて売れる商品を開発できれば、人々の生計向上につながるはずです」。そう話すのは、長年ブータンとの懸け橋になってきた石州和紙協同組合代表理事の久保田彰さん。久保田さんら紙すきの職人



ブータンでのワークショップで日本式の紙すき方法を披露すると、みんな興味津々身を乗り出した



自分ですいた紙で作ったワークショップの修了証書

## 紙すきの伝統を未来へ

1300年以上続く島根県浜田市の紙作り。浜田市はその伝統産業を生かし、ヒマラヤの山岳国ブータンで挑戦を続けている。

### 海を超えたつながりの共通点は紙

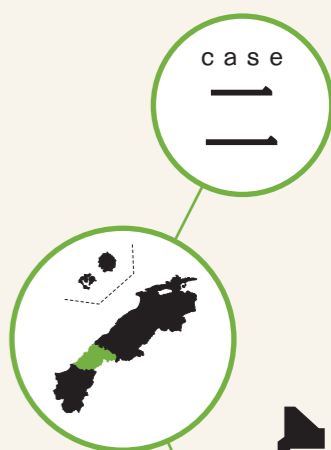
ザパツ、ザパツ。勢いよく音を立てて水が跳ねる。職人の手によって、一枚一枚、紙がすかれていく。ここは、島根県浜田市の紙す

がブータンに赴いたり、研修員を受け入れるなどの協力を続けてきた。

### 一つ一つ伝える品質改善のヒント

2013年からは、生産地の一つ、東部のタシヤンツエ県で紙の品質向上に取り組んでいる。首都ティンプーから東へ、車で2日半。久保田さんと共に生産現場を訪れた浜田市役所の山口康弘さんは、こう振り返る。「屋外の作業場では、たき火から灰が飛んできたり、ほこりだらけだったり…。あぜんとなりました。良質のものを追求するという、日本では当たり前の感覚が通じなかったのです」。ブータンの紙の質が悪い理由、それは一目瞭然だった。

ブータン式の紙すきでは、布を張った木枠に原料を入れてかき混ぜ、そのまま天日乾燥するため、細かいごみもそのまま布の上に残ってしまう。そこで久保田さんは生産者30人を集めてワークショップを開催。日本式の紙すき技術を参考にしてみようというため、すき簀すきという竹ひごの道具の作り方など、品質改善につながる小さな工夫を一つずつ伝えていった。「コウゾを煮た後に、ごみを一つ一つ手作業で取り除くのも品質向上には必須です。ブータンの生産者にとっては初めての経験でし



島根県  
浜田市



木枠のまま乾燥させるのがブータンならではの紙の作り方



ワークショップで、紙の原料のダフネを煮る参加者たち。20代の若者も多い

たが、みんな好奇心の塊のように新しいことに取り組んでいます」と久保田さんは話す。

生産者の一人、ヤンドンさんは、昨年12月に研修で浜田市を訪問。トロロアオイという粘着液を加えると紙の質が一定になることを学び、ブータンに帰ってからすぐに実践した。

今年2月に久保田さんが現地を訪れると、「私が作った紙、見てください」と、一番に駆け寄ってきたのがヤンドンさんだった。手に取って見てみると、ごみが入らず、厚さも均一になっていた。「まだまだなので褒めませんでしたが」と言いながらも、自主的な取り組みがとまらなくなったと久保田さんは笑顔を見せた。

ワークショップの修了証書にも、自分たちですいた紙を使った。「手すき紙にこんな使い方があるのか」とタシヤンツエ県知事も驚いていました。彼ら自身で、新しい紙の可能性を探してほしい」と久保田さん。ブータンの人々が受け継いできた紙すきの伝統に石州和紙の技術を取り入れて、さらなる質の改善につなげたいと考えている。

同じ職人だからこそ、言葉が通じなくても紙すきを通して分かり合える。ブータンらしさを生かした紙が生まれる日を心待ちに、浜田市の挑戦は続く。